



大阪科学・大学記者クラブ 御中
(同時資料提供先：文部科学記者会、科学記者会)

2022年3月28日
大阪市立大学

「トロッコ問題」における判断と熟慮時間の関係を分析 判断に伴う責任から逃れようとする日本人大学生の心の特性を検討

※トロッコ問題：「多数の命を救うために一人の命を犠牲にする判断は、道徳的に正しいのか」が問われる道徳ジレンマ課題

<本研究のポイント>

- ◇時間的な制約がある状況とない状況で、「トロッコ問題」に対する心理的反応の違いを検討。
- ◇実験の結果、日本人大学生は功利主義的な判断を相対的に示さない可能性が、また、じっくり考えるうちに責任を逃れようとする結果として、功利主義的な判断がますます示されにくくなる可能性が示唆された。
- ◇功利主義的な判断か義務論的な判断かという分析枠組みは、「トロッコ問題」における日本人の判断を考察する上では適切ではない恐れがあり、今後は「判断に伴う責任そのものから逃れようとする心の特性」に着目する必要がある。

<用語解説>

- 功利主義的な判断・・・多数の命を救うために一人を犠牲にする判断
- 義務論的な判断・・・結果の善し悪しにかかわらず一人の命を犠牲にすることは許されないとする判断

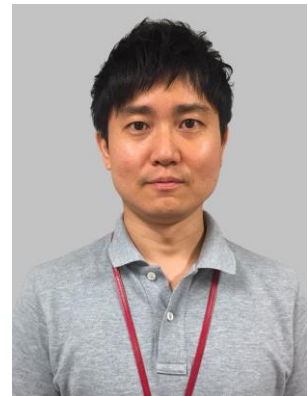
<概要>

大阪市立大学大学院文学研究科の橋本 博文准教授、大阪市立大学都市文化研究センターの前田 楓研究員、大阪市立大学大学院文学研究科の松村 楓大学院生の研究グループは、「トロッコ問題」に対する時間的制約の効果について検討し、日本人大学生は熟慮を重ねると義務論的判断がより顕著になる可能性を明らかにしました。

トロッコ問題とは、「多数の命を救うために一人の命を犠牲にする判断は、道徳的に正しいのか」が問われる有名な道徳ジレンマ課題です。ここでは、多数の命を救うために一人を犠牲にする判断（功利主義的な判断）と、結果の善し悪しにかかわらず一人の命を犠牲にすることは許されないとする判断（義務論的な判断）のどちらを優先するかが問われています。これら二つの判断を扱う近年の心理学研究では、二重過程理論が注目されており、この理論を踏まえれば、義務論的判断は自動的な直観システムによるもの、また、功利主義的判断は論理的な熟考システムによるものと捉えることができます。

二重過程理論を扱う先行研究によれば、義務論的判断が功利主義的判断よりも先行すると予測できます。しかし、日本人大学生 119 名を対象とする本研究の結果、時間的な制約のもとでの直観的判断（理性的判断）と熟慮した後の判断（話し合い後の判断）を比較すると、先行研究とは異なり義務論的判断へと人々の判断が変化していく可能性が示唆されました。この研究の成果は 2022 年 3 月 3 日（木）国際学術雑誌「Frontiers in Psychology」（IF=2.988）に掲載されました。

私たちは、文化によって心の働きが異なるという常識的な理解を超えて、「どのように」、そして「なぜ」心の文化差が示されるのかを、調査や実験を通じて考えています。今回の実験も、トロッコ問題についてのジョシュア・グリーンによる議論（『モラル・トライブズ：共存の道徳哲学へ』）についてゼミナールで話し合ったことをきっかけに行ったものです。「責任回避戦略」をキーワードにすれば、日本人の心の特性について、もう少し見通し良く理解できる気もしますが、当然ながら、今回の結果のみで何らかの結論を示すことができるとは考えていません。この知見を一つの足掛かりとしながら、心や行動の文化差について、もう少し分析できればと考えています。



橋本 博文准教授

■掲載誌情報

雑誌名： Frontiers in Psychology (IF = 2.988)

論文名： Fickle Judgments in Moral Dilemmas: Time Pressure and Utilitarian Judgments in an Interdependent Culture

著者： Hirofumi Hashimoto, Kaede Maeda, Kaede Matsumura

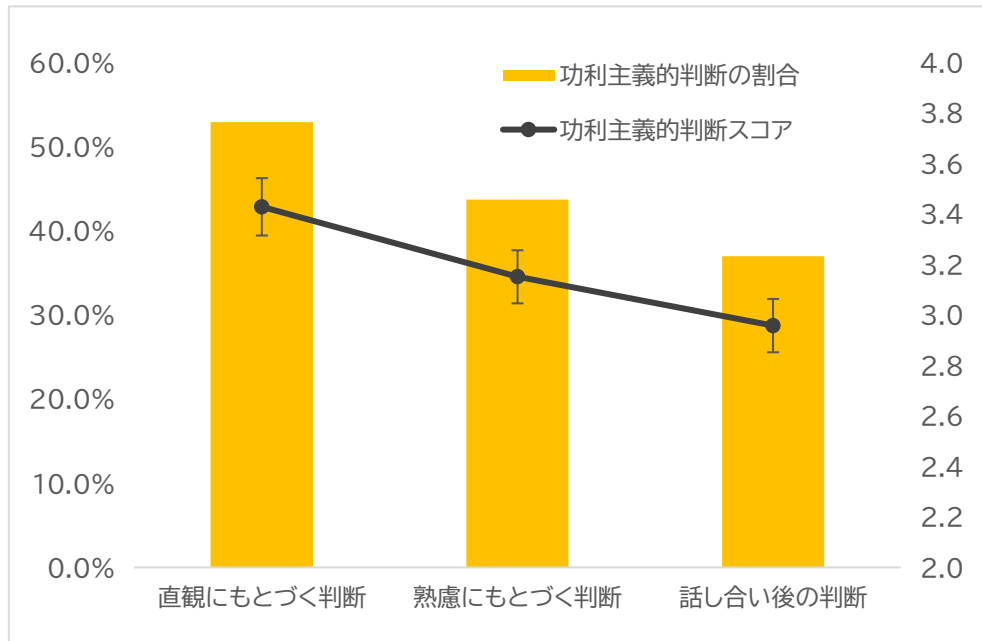
掲載 URL: <https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/fpsyg.2022.795732/full>

<研究の背景>

道徳ジレンマ状況下における意思決定課題の一つに、「トロッコ問題 (Foot, 1978)」があります。5人の命を救うために1人を犠牲にする判断（功利主義的判断）と、結果の善し悪しにかかわらず1人の命を犠牲にすることは許されないとする判断（義務論的判断）のどちらを優先するかがこのトロッコ問題では問われます。これら二つの判断を扱う近年の心理学的研究では、二重過程理論が注目されており（e.g., Greene et al., 2001）、この理論をあてはめてみると、義務論的判断は、自動的な直観システム（すなわちシステム1）によるもの、また、功利主義的判断は論理的な熟考システム（すなわちシステム2）によるものと捉えられています。道徳的な判断としては義務論的判断が功利主義的判断よりも先行すると考えられているわけです。実際に、時間的な制約を実験参加者に与えた（つまり、すばやく直観で判断することを求めた）先行研究においては、義務論的判断が顕著に示される可能性が示されています（e.g., Suter & Hertwig, 2011）。

<研究の内容>

本研究では、時間的な制約が道徳ジレンマ状況における判断に及ぼす効果について、先行研究を踏まえつつ、参加者内要因配置の実験デザインのもとでその追試を試みました。また、時間的な制約の有無に加え、熟考システムの働きを強めることを念頭に道徳的判断について少人数で話し合わせる機会を設定し、話し合いの効果についても併せて分析しました。その結果、図に示すように、先行研究から予測される結果とは異なり、時間的な制約のある直観的判断と熟慮した後の判断（理性的判断・話し合い後の判断）を比較してみると、義務論的判断へと人々の判断が変化していく可能性が示唆されました。また直観にもとづく判断のみをみても、他国で行われた先行研究と比べて、功利主義的な判断が示されにくい可能性も見て取ることができます。



<今後の展開>

今回得られた結果は、二重過程理論にもとづく先行研究の結果とは矛盾するものであり、まずは、今回得られた結果がどの程度頑健なものなのか、また頑健であるとするならば、こうした矛盾がなぜ示されるのかについて、文化心理学の観点から詳細に検討していく必要があると考えられます。

比較文化研究を展開していくことによって得られた知見の数々は、長い目で見れば、心の文化的多様性の理解に必ず寄与すると信じています。

<資金情報>

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（直観的協力行動の集団拘束性に関する比較文化心理学的研究 [課題番号：21K02992]）の対象研究です。

【研究内容に関する問合せ先】

大阪市立大学大学院 文学研究科

担当：准教授 橋本 博文

TEL：06-6605-2376

E-mail：hirofumihashimoto@outlook.com

【ご取材に関する問合せ先】

大阪市立大学 広報課

担当：上嶋^{かみしま} 健太

TEL：06-6605-3411

E-mail：t-koho@ado.osaka-cu.ac.jp